

ンターの現況を報告した。岡田はワシントン大学で満蒙語を講じ、今夏は台北の滿洲語文獻を調査する。山田はイスタンブールのウィグル文書二点を解説発表した。神田は「百二十老人語録」、「万曆武功録」を会読していること、および今夏「老滿文原檔」が故宮博物院から複製刊行されることを報告した。島田は「蒙古律例」の逐条研究を進めている。

続いて海外事情報告の第一部として植村のインド旅行、樋口のアフガニスタン、クンドゥズのチャカラク・テペ遺跡の発掘調査、およびユネスコ主催のドゥシャンベにおける「クシャン朝中央アジアの歴史・考古学・文化に関する国際会議」の報告があつた。

夜は植村のフィルム上映に当てられた。

第三日の十五日の午前には、海外事情報告の第二部として、永田がトルコ事情、河内がワシントン大学での経験について語つた。

続いて研究発表に移り、田山が「遊牧国家論に関する文獻」と題して、自編の文獻目録に基づいて論評を加えた。これに對して匈奴の單于が公權力でないとする根拠、遊牧封建制の定義、家畜税が地代と見なし得るか否か、遼・金・元が果して遊牧国家の系列に入るかどうかについて意見が沸騰した。

午後の研究発表では、桜井が「日本におけるシャマニズム研究の課題」を説いた。桜井は入巫・成巫過程を比較して東

北日本型と西南日本型に分けた上、シャマニズムの最も特徴的な行事として、「口寄せ」を取り上げ、これを「神口」、「生き口」、「死に口」に分け、さらに「死に口」を「古口」、「新口」に二分して、その行われる地方が異なることを指摘、恐らく新口が早く発生し、「古口」は祖靈崇拜の発生後の新しい形式であろうと推測した。

岡田の「ウケクト・ハーン伝説の由来」は、古いモンゴルの英雄叙事詩に、箱入りの小児王と男装の女丈夫のオイラット征服を語るものがあつたこと、これが元来ウリヤンハン部族の族祖伝承であつたらしいことを論じた。

夕食後、総括討論とスライド映写があり、第四日の十六日朝、正式に散会した。

会の規模が小さかつたことは、自由な意見の交換を容易にする効果があり、かえつて成功であつたと思われる。

第三回東亜アルタイ学会

岡田英弘

東亜アルタイ学会 (East Asian Altaic Conference) というのは、一九六六年夏、京都大学内陸アジア研究施設(羽田記念館)主催で第一回が開かれて以来、日本、中華民国、大韓民国のアルタイ学専門家を集めて開かれて来た。毎回参

加者十数人程度の、ごく小規模の国際学会である。現在までは Harvard-Yenching Institute からの財政的援助もうけている。昨一九六八年にはソウル大学の主催で韓国において、そして今一九六九年には八月一七日―二十四日の一週間、台湾大学の主催で台北において開催された。

今回の会議に対する中国側の熱意には、まことにみなみならぬものがあつた。わざわざ会議の紋章をデザインして、中英両文の会名のほかに、チベット、満洲、日本(カナ)、モンゴル、韓国(ハングル)、ウイグルの各国字で「会議」を表す文字を組み合わせたなどもその一端である。

会議は、極めて純学術的な性格を保つて進行した。日程を記せば、第一日の八月一七日(日)の午後、日本・韓国の出席者が到着、愛国西路の自由之家(Liberty House)に投宿した。

八月一八日(月)朝、主催者の国立台湾大学に校長を訪問。ただし校長の銭思亮氏は病氣入院中なので、出迎えたのは代理の教務長沈熊慶氏であつた。一〇時から台大構内の新教室大樓七階の Language Laboratory で開会式が行われた。これから、毎日ここが会場として使用された。名譽議長の前文学院院长沈剛伯氏の歓迎の辞のあと、日・韓代表の謝辞、ここまでは平凡であつたが、その次に異色ある行事があつた。つまり少数民族語による式辞である。満洲語を広祿(新疆出

身のシボ人、立法委員)、モンゴル語をラシドンドク(チャハル・モンゴル人、ミューンヘン大学講師)、チベット語を歐陽無畏(漢人だが、Bras spungs で三年修行したラマ、チベット名 Chos 'phel 'jigs med、国史館総務課長)、ウイグル語をアブドラ(ウイグル人、立法委員)といった顔振れで、これはテープに収めていづれ各国へ寄贈されるとのことであつた。

これが終つていよいよ本格的な sessions に入つたのだが、ここで出席者のリストを示す。

日本…萩原淳平、神田信夫、松村潤、岡田英弘、島田正郎、山田信夫。

韓国…崔鶴根、金芳漢、高柄翊、李崇寧、黄元九。

中国…陳捷先、陳慶隆、Abdullah Emiloglu、傅樂成、Jagchid Secin(札奇斯欽)、李学智、歐陽無畏、孫同勛、陶晋生、王民信、Rashidonduk Shii-yembo(席振鐸)。

以上二名である。

一二時二〇分からは中国、日本、韓国それぞれのアルタイ学界の近況報告があつた。中国の報告者はジャクチトで、一人一人の研究者をまんべんなく挙げて、その仕事に触れたものであつたが、そこに挙がつた研究者は大部分、会議の出席者といった次第であつた。そこで触れられた「旧満洲檔」は、

すなわち有名な「滿文老檔」の原本で、故宮博物院が同院所蔵の現物から写真複製して、洋製一〇冊を頒布することになったものである。これは院長蔣復璁博士の英断もさることながら、そのかげには陳捷先のなみなみならぬ努力があつたと聞いている。なお陳は、近く発刊される季刊「故宮文獻」の編者でもあり、毎号故宮所蔵の清朝の古文書の複印に、研究論文を付して世に送る計画であつて、これについて日本の論文の入手かたについて協力を要請された。

報告の後、質問に應じてジャクチトは、自ら長なる政治大学の辺政研究所について説明、現在モンゴル、チベット、トルコの三コースがあること、修士課程の学生を收容することを明かにした。いずれ滿洲語コースも置かれるという。

日本については山田が、韓国については李が報告したが、李のは詳細な文献目録の形を取つた。その中で李が言及した、前年のソウル會議の直後に韓国で盛んになったという、韓民族の北方起源説對南方起源説の論争は出席者の興味を呼び、活発な質問が集中したが、李の説明によれば、若い世代は南方説を支持する傾向があるという。

一五時過ぎに日程を終え、台大構内に新築の研究図書館を參觀の後、一七時から再び会場で台大校長招待のカクテル・パーティ、続いて中山北路の國賓大飯店で、議長沈剛伯氏の招待の晩餐会があり、教育部長（文相）も出席した。

このあと連日、中国式の招待が続き、出席者の方では疲れはてて悲鳴をあげる向きもあつたほどである。

八月一九日（火）から三日間は paper reading に当つられ、総計一八篇が提出された。発表は姓名のABC順により、先ず陳捷先の「The value of 'The Early Manchu Archives」があり、「旧滿洲檔」について説明を加え、その歴史及び言語研究の資料としての価値を強調した。

次の陳慶隆は「A study of 'Ho-chuo」を読んだが、明末・清初の *khwaja* が、東トルキスタンに勢力を持ち、ムハムマドの子孫と称したこと、及び地名のハラ・ホージョがこのホージャと無関係なことなどを説いた。

崔鶴根の「On the vowel u in the vowel-system of written Manchuian」は韓国語における「いわゆる ablaut の現象をとらえて来てこれを vowel-opposition と名づけ、滿洲語にも同じ現象が見られる」としてoとuとを対立させたものであるが、滿洲語の引用、分析に不正確な点が多かつたと思う。萩原淳平の「The political ideas of Lindan Khan」は、モンゴル人の国家を三つの類型に分け「エセン・ハーン、ダヤン・ハーンの游牧国家、アルタン・ハーンの游牧・農耕国家、元朝を征服国家とし、リンダン・ハーンは第一の游牧国家を目指していたものとする。しかしこれは論拠があまりにも薄弱で、リンダン・ハーンもアルタン・ハーンと同じく、

漢人農耕民のコロニーであるバイシンを盛んに建設していた一事からもうかがえるごとく、むしろ第二の農耕・遊牧国家の方が事実に近いだろう。

ジャクチの “Why the Mongolian Khans adopted Tibetan Buddhism as their faith” はさすがに好い研究であつた。これはチンギス・ハーンから元代に及ぶ宗教情勢を丁寧に描き出し、結局シャマニスティックな Bon を基層に持つチベット仏教が、シャマニストであつたモンゴル人にもつとも受容されやすかつたと指摘する。

これで同日の午前のプログラムを終り、全員外双溪の故宮博物院に赴いて、蔣院長の中餐の接待を受け、会議のための特別展示を見た。展示品には満洲語のものが多く、「旧満洲檔」の現物や、満文の「起居注」「国史本紀」などもあつたが、人目を奪つたのは紺紙金泥のチベット文大藏經、及び満文、蒙文の刻本大藏經、それに美しく描かれた満文地図の大コレクションであつた。同夜は政治大学の産業管理中心（センター）において校長劉季洪氏の招宴があつた。

八月二十日（水）の paper は、先ず神田信夫の “Shen Chih-liang and his works on the Manchu language” に始まつた。これは「大清全書」の著者として知られる沈啓亮の生涯を考証し、その他の著作を紹介したものである。金芳漢 “Relation between Korean and Altaic languages” は、マ

ルタイ系諸語の共通祖語と、中期韓国語との間で、いかに母音が shift したかを説いた。高柄翊 “Patterns of the Mongol conquests” は、モンゴルの高麗、安南に対する政策を手がかりにして、彼らの征服地統治を三形態に分ける。第一は土着の統治組織の上にモンゴル諸王が乗つて間接に統治するもので、チャガタイ、オゴタイ、キプチャク・ハーン国をこれに含める。第二はモンゴル人自身によつて組織された機関による直接統治で、金の旧領、ウイグル、ホレズムをこれに含める。第三は降伏した国家の形態を保存して属国とし、ダルガチを派遣して監視させるもので、高麗と安南がこれに属するとする。しかし、私見によれば、モンゴルの統治が、土着の組織を利用した間接統治でなかつたことは一度もない。金の旧領にしても、その統治に當つた中書省そのものが、金人の組織にはとんど手を加えてないしろものである。この点を別にしても、なかなか好い研究であつた。李崇寧 “On stem-formation of Korean” は中期韓国語の suffix の morphology がトルコ語に似ていることは指摘したものである。

その次に予定されてゐたのは、李学智 “An analysis of the problem in the selection of an heir during the reign of Nurhaci or Emperor Taizu of the Ching Dynasty” であつたが、李は出席せず、他人をして代読せしめた。内容はただ史料を羅列しただけのもので、誤りも少くなかつた。

松村潤“*The Early Manchū Tablets*”は、昔「阿濟格略明事件之滿文木牌」として李德啓によつて公刊された、一六三六年の滿洲軍の中國遠征の記録を、新たに「滿文老檔」と対照して正しい読み方を定めたものである。岡田英弘“*Yüan ch'ao p' shih, a pseudo-historical novel*”は、これまで「元朝秘史」が史実の記録として受け取られていたのに対して、これが全くの小説であり、史実を随意に歪曲しているばかりでなく、「秘史」だけに見られる多くの挿話はことごとく自由な創作であること、従つて「秘史」に基いて行われて来た従来のモンゴル史研究は根本的に改革されねばならないことを指摘した。当然これに対しては、質問の中で異論が続出した。

番外として那琦という人の“*The diffusion of Sibe tribe*”という話があつた。那琦氏は開原出身のシボ族で、滿洲語は出来ず、その話も漢文・日文の資料だけ使つてシボに似た発音の地名を拾い集め、これがシボ族の發展の跡を示すというに過ぎなかつた。

終つて国立中央図書館に向い、故宮博物院で見たのと同じような滿洲語の地図の展示を見た。中には乾隆の「皇輿全圖」の原本とおぼしきものもあつた。見学終了後、晚餐は館長包遵彭氏の招待を受け、歓談に時を過こした。

八月二十一日(木)は *paper reading* の最終日であつた。

歐陽無畏の“*On the 'Saskya Chronicle'*”は、東洋文庫にある *Bkra shis lhun grub* 作の短い年表をかいまんで読んだものであつた。ラシド・ンドク“*On Seter*”は、モンゴルの家畜儀礼の一つについての報告である。神仏に奉獻された家畜には五色のハダク布が結びつけられる。これを *seter* といひ、チベット語 *ishe thar* (延喜) に由来する。 *seter* はまた *ongyon* ともいわれ、これの附された家畜は一度と人の使用に供せられない。孫同勛“*Some hints on the marriage custom of early Toba*”は、鮮卑拓跋氏の間で *Levirate* の習慣があつたことを北魏の秦明王翰の諸子に関する魏書の記述の矛盾から割り出したもの。陶晋生“*The Jurchen chin-shih degree in the Chin Dynasty*”は、金代の女真進士の制度とその出身者の果たした役割について要領よくまとめたもの。王民信の“*Darghan and darghaei*”は、*ダルハン* と *ダルガチ* について漢文の資料を雑然と集めたあげく、*ダルガチ* は *ダルハン* に *suffix -ei* を附した形だという。しかし、両語の間に何の関連もないことは言うまでもない。最後の山田信夫“*A survey of Uighur documents preserved in various*”は、ウイグル文書採訪の旅についての報告であつた。

午前の日程を終り、中央研究を訪れて、蔡元培館にて総幹事李亦園氏から中食の接待を受け、そのあと歴史語言研究所で、李光濤氏の管理する古文書のコレクションの中から、満

文の明実録、「旧満洲稿」の片割れと見られるものなど、数々の珍貴な滿蒙文の古文書を観た。

夜は台大校長の招待で、民生東路の中華川菜餐厅で晚餐会があつた。そのあと、台大構内の会場へもどり、モンゴル、チベット、ウイグルなどの民族衣裳をつけて歌や踊りの披露があつた。出演者はおもに台大の学生の美少年、美少女たちで、モンゴル服を着用に及んだジャクチト氏のモンゴル語による司会で、楽しい催しであつた。

八月二十二日(金)、予定を繰り上げて business meeting が開かれ、以前からの国際協力プロジェクトの「アルタイ学文獻目錄」、「アルタイ学辞典」について進捗状況が報告され、来年は東京において開催することを決議した。

中食は台大の近くの僑光堂で中国辺境歴史語文学会の招待だったが、この日の午後、全日程はじめての自由時間を与えられた。夕食は西寧南路の會賓楼で、陳捷先、ジャクチト阿氏の招待だった。

八月二十三日(土)は excursion に当てられ、バスで陽明山、北投を経て東シナ海岸に出、野柳の奇岩群を見物して、基隆から台北に帰った。その夜、敦化路での蒙古烤肉の会食後、正式に閉会が宣せられた。

以上、東亜アルタイ学会第三回会議は、組織の衝に當つた陳捷先君らの献身的努力のおかげで、アジア人自身によるア

ジア研究の推進のためには不可欠の、アジアの学者の間の個人的友好関係の樹立に大きな功績をあげ、大成功に終つたといえよう。来年の東京会議がさらに一步前進することは、今度は我々日本人の責任である。

マックリーヴ氏の訃

榎 一 雄

ロンドン大学東洋アフリカ学院 (School of Oriental and African Studies, University of London) 法学部 (Department of Law) で東洋法学準教授 (Reader in Oriental Laws) として中国法学を講じていたヘンリー・マックリーヴ (Henry McAleavy, 1912. 1. 11-1968. 10. 26) 氏が昨年腎臓病のために急逝せられた。ここに謹んで哀悼の意を表するとともに、その経歴と学績の一斑とを記すこととする。

氏はマンチェスター郊外エクルス (Eccles) にアイルランド人でカトリック信者の青物商の一人息子として生まれた。父君五十歳の時の子で、八歳にして父を喪い、四十代の母君は紡績工場の女工となつて氏の教育に當つた。十五歳で義務教育を終つた時、体が弱くて読書にばかり耽つていた氏を見て、周囲の人々は当時の古い考えに従つてカトリック教会の神父にするより仕方がなからうと言つたといわれる。しかし